

保育士・教員養成課程における学生の声楽技能修得に関する考察

— 学生の意識調査から —

平本 弘子⁽¹⁾

保育士・教員養成課程に入学してくる学生のほとんどは音楽学習経験が少ないのが実情であり、卒業までに学生の音楽実技の能力を指導者にふさわしいレベルまでに引き上げるための授業の在り方は常に大きな課題となっている。声楽授業を能率的かつ効果的な授業内容へと改善するために、まず筆者自身の声楽の授業の事前と事後に学生へのアンケートの形で「歌うこと」への意識調査を行った。その結果と実際の本人の実力とを比較する中で現状を認識し、これからの課題を考察した。そこから、個々の学生の音楽的なレベルだけでなく、求めるもののギャップとコンプレックスなどが見えてきた。一方授業内容の検証も行った。一般的にピアノ実技に関しては個人レッスンで個々の能力を育てる授業がシステム化されている。それに比して声楽実技は、ほとんどの場合、集団授業で対処しているのが現状である。筆者の集団授業の内容を分析することで、その効果と問題点を明確にした。それらを踏まえながら、保育士養成課程と小学校教員を養成する課程での声楽授業の共通点と相違点をも展望した。

キーワード：声楽、歌唱能力、集団授業

I. はじめに

保育士・教員養成課程における大きな課題の一つに、どうすれば音楽学習経験の少ない学生の音楽的な能力を卒業までに指導者に相応しいレベルにまで引き上げることができるか、ということがある。小学校から高校までに音楽クラブを経験したことのある学生はまだしも、全く音楽経験の無い学生がいきなりピアノを弾いたり子どもの歌を表現力豊かに歌ったりすることは、多くの学生にとって入学後の重い負担となっている。声楽に関していえば、「自然で美しい歌唱」のイメージさえも乏しい学生が少なくない。

そのような実情の中で、多くの大学で音楽実技の習得を目的とする授業時間は十分とは言えず、またその授業時間もピアノ実技、ひいては「弾き歌い」というハードルの高い課題に費やされる。個人レッスンが導入されるピアノ実技と比べて、声楽実技は集団授業が一般的で、一人ひとりの歌唱力をしっかり身につけさせる時間には恵まれない。

本稿は、その現状を踏まえ、筆者自らの授業を通して個々の歌唱能力を高めるための能率的かつ効果的な授業内容へと改善するための一考察である。

まず、A大学の保育士・幼稚園教諭を目指す新入生を対象に、歌に関する意識調査を行った。意識調査は、声楽の授業を受ける前と後に同じ質問でアンケートの形をとった。授業の事前及び事後におけるアンケートの回答結果を比較し、そこから読み取れる学生の意識の変化から、声楽授業の指導内容の理解度や実技指導の効果を明らかにする。また、個々に実技試験の成績との関係性も見ると。結論としてクラス授業の形態で個々の歌唱能力を伸ばすにはどうすればよいか、その効果と課題を考察する。そして、小学校教諭を養成する課程における声楽指導の在り方をも展望したい。

II. 音楽に関わるカリキュラム

A大学の教育学部は、主に小学校教諭を目指す学生が所属する教育コースと保育士・幼稚園教諭を目指す

⁽¹⁾福山市立大学教育学部非常勤講師

学生のための保育コースで構成される¹。まず教育コースにおける小学校教諭免許の取得に関わる音楽科目としては、1年生1・2学期に「音楽表現活動Ⅰ（基礎）」（選択）、同じく3・4学期には「音楽表現活動Ⅱ（応用）」（選択）が履修可能である²。2年生1・2学期に「初等音楽」（小免選択必修）（これは保育コースも履修可能）、2年生3・4学期に「音楽科指導法」（小免必修）、3年生1学期に「音楽教育特論」（選択）、このほかに、3年次あるいは4年次1学期に「音楽表現B（声楽）」（選択）、4年生1学期に「音楽表現A（ピアノ）」（選択）、2学期に「音楽表現演習Ⅰ」（選択）が設けてある。

次に保育コースでの保育士資格及び幼稚園教諭免許の取得に関わる音楽科目としては、1年生1・2学期に「音楽表現活動Ⅰ（基礎）」（選択必修、ただし実習参加要件）、3・4学期に「音楽表現活動Ⅱ（応用）」（同）、2年生では音楽の授業は無く、3年生1・2学期に「保育内容（表現B）」（必修）、3年生1学期に「音楽教育特論」（選択）、3年あるいは4年生1学期に「音楽表現B（声楽）」（選択）、4年生1学期に「音楽表現A（ピアノ）」（選択）、2学期に「音楽表現演習Ⅱ」（選択）が組まれている。

小学校教諭を希望する学生は、2年生3・4学期に「音楽科指導法」で共通教材には触れるものの、声楽実技能力の習得に特化した科目ではないため、4年生1学期「音楽表現B（声楽）」（選択）や2学期の「音楽表現演習Ⅰ」（選択）を履修しなければ、専門的な声楽の指導を受けることの無いまま採用試験に臨むことになる。

一方保育士資格及び幼稚園教諭免許の取得を目指す学生は、1年生の1・2学期「音楽表現活動Ⅰ」で声楽実技を学ぶが、授業の半分は音楽理論を扱うものである。次に声楽実技に特化した授業としては、3年生あるいは4年生の1学期に「音楽表現B（声楽）」を選択科目として履修できる。この授業では、かなり専門的な歌唱法を学ぶ。このほかに、4年生2学期「音楽表現演習Ⅱ」（選択）があるものの、1年次の授業以外はいずれも選択科目であり、他の科目の履修状況により、選択する学生は限られる。

Ⅲ. 学生の意識と授業に期待するもの

1. アンケートの概要

A大学では、多くの大学と同様に教育学部の入学試験時に音楽実技は課していない。したがって学生は、音楽実技の授業に対して大きな期待と同時に、未経験の音楽実技には不安を抱いて学修を始めることになる。

本稿では、声楽の授業を開始するにあたり、歌うことに対して学生が抱く自己評価、授業への期待などを把握するためのアンケートを行った。対象者は、主に保育士や幼稚園教諭を目指す1年生のための声楽授業の履修生である。

アンケートは自らの声楽能力に関する質問や音楽経験に関する15項目で構成し、5件法で回答を求めた。またアンケートは記名式とした。記名式とした理由は、本研究がそもそも一人ひとりの学生の学修に寄与するものとして、個々人の声楽に対するコンプレックスの有無や程度を理解することを目的としていることが挙げられる。また、個々の学生が持っている声楽能力の自己評価と実際の授業の成績とを比較して、その差から推察できる学生の認識力と実際の音楽能力との違いを知る中で、今後の授業を進めるにあたって心がけるべき留意点を確認したいと考えたからである。

授業の成果を学生の意識から精査するため、アンケートは2018年4月の授業開始時（「事前アンケート」）と同年8月の授業期間終了時（「事後アンケート」）に行った。アンケートを実施する際、授業改善のための研究を目的とするものであることを口頭で伝達した。また、アンケート用紙には、研究データとして用いること、個人が特定されることはないこと、回答内容は成績とは一切関係しないことを明記した。その上で口頭でも周知を行い、協力を求めた。事後アンケートも同様の手順で実施し、事前、事後ともに回答数は52であった。

アンケートの質問項目は、以下の15項目である。

- ①歌うことが好きである
- ②人前で歌うことが好きである
- ③歌う時の声量に自信がある
- ④歌う時の音程の正確さに自信がある
- ⑤歌う時のリズムの正確さに自信がある
- ⑥良い声で歌えていることに自信がある
- ⑦歌う時の発音の明確さに自信がある
- ⑧笑顔で歌うことを意識している
- ⑨1曲1曲をどのように歌うべきかを理解している
- ⑩歌いたいと思う通りに歌える技術をもっている

- ⑪他者から「歌がうまい」と言われる
- ⑫保育士や教師は子どもの前で歌えるべきだと思う
- ⑬小学校では音楽授業で歌う機会は多くあった
- ⑭中学校では音楽授業で歌う機会は多くあった
- ⑮高校では音楽授業で歌う機会は多くあった

この5件法での設問の他に、自由記述での回答を求める項目も設けた。事前アンケートでは、課外活動（合唱部、少年少女合唱団等）で歌った経験の内容、および授業で期待することを問う項目の2項目、事後アンケートでは、自分の歌唱力が向上したと思うかどうかを問う設問で理由を尋ねる項目と、授業内容についての感想や改善点を問う項目を自由記述回答とした。

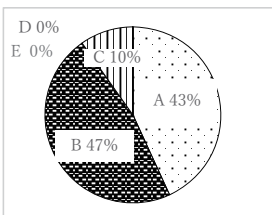
2. 事前アンケートの回答結果

事前アンケートの各項目の回答結果を図1から図12として示す。なお、5件法の集計においてAからEのラベルを使用した。ラベルの内訳は以下の通りである。

- A 当てはまる
- B やや当てはまる
- C どちらでもない
- D やや当てはまらない
- E 当てはまらない

図1 歌うことが好きである

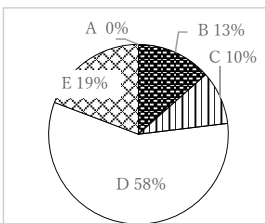
A 22人 B 24人 C 5人 D 0人 E 0人



全体的に歌うことは好きだという傾向がみられる。ただし、質問では歌のジャンルは特に問わない回答である。

図2 人前で歌うことが好きである

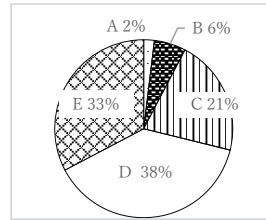
A 0人 B 7人 C 5人 D 30人 E 10人



①で「好きである」と答えた学生が多いことと比較すると、それは人前で歌うことではないことがわかる。

図3 歌う時の声量に自信がある

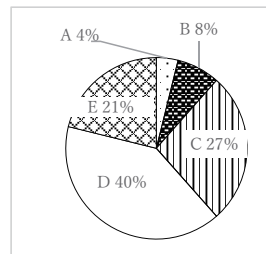
A 1人 B 3人 C 11人 D 20人 E 17人



自分の声量がどのくらいあるかという問いについては、音楽経験の少ない学生にとっては、イメージが湧きにくい可能性がある。

図4 歌う時の音程の正確さに自信がある

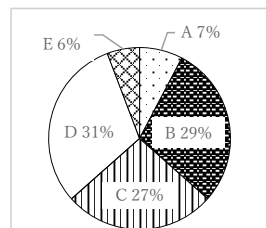
A 2人 B 3人 C 14人 D 21人 E 11人



学生は、音程が正しくとれているかについて自信がもてない。これは、日頃から意識的に音程を正しく歌うことが習慣づいていないことが要因だと考えられる。

図5 歌う時のリズムの正確さに自信がある

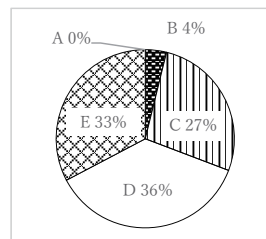
A 4人 B 15人 C 14人 D 16人 E 3人



リズムが正確かどうかについては、音程が正しいかどうかと比べて、自信が持てるようである。

図6 良い声で歌えていることに自信がある

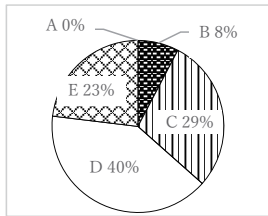
A 0人 B 2人 C 14人 D 19人 E 17人



自分が良い声で歌えているかという質問には、自信が無いという回答が69%と、多めであった。

図7 歌う時の発音の明確さに自信がある

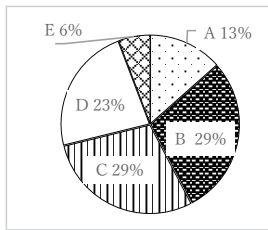
A 0人 B 4人 C 15人 D 21人 E 12人



歌う時の発音の明確さについては自信がなく、そもそも明確な発音についてのイメージもまだ持っていないと考えられる。

図8 笑顔で歌うことを意識している

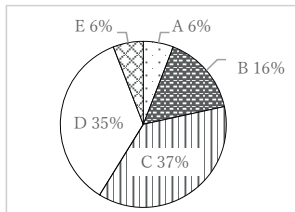
A 7人 B 15人 C 15人 D 12人 E 3人



歌う際に、23%の学生が笑顔を意識していることがわかる。これは筆者の予想よりも高い数値であった。

図9 1曲1曲の歌をどのように歌うべきかを理解している

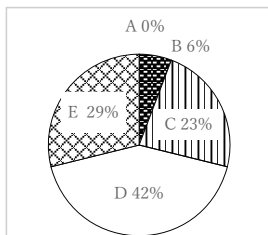
A 3人 B 8人 C 20人 D 18人 E 3人



新入生ということもあり、それぞれの曲についてどのように歌うべきかを理解している学生は少ない。

図10 歌いたいと思う通りに歌える技術をもっている

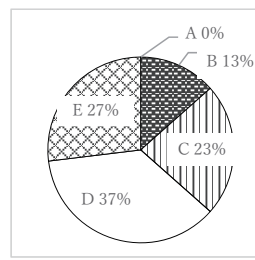
A 0人 B 3人 C 12人 D 22人 E 15人



自分が歌える技術を持っていると思う学生が少ないのは、初心者である学生にとっては、ごく自然な結果と思われる。

図11 他者から「歌うまい」と言われる

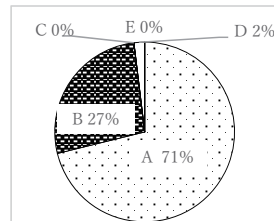
A 0人 B 3人 C 12人 D 22人 E 15人



設問①の回答結果から、人前で歌うことがあまり好きでない学生が多いことが明らかにはなったが、この回答結果から、人に褒められた経験が少ないことがその背景にあると考えられる。

図12 保育士や教師は子どもの前で歌えるべきだと思う

A 37人 B 14人 C 0人 D 1人 E 0人



ほとんどの学生が、意識としては保育士に歌唱力があることを望んでいる。

このほかの自由記述回答では、高校までに課外活動や学外の合唱団に所属していた経験の有無に対しては、52人中7人の学生がコーラスや吹奏楽の経験があると答えていた。

また、この授業に期待することは何かという質問に対しては、一様に保育士として歌唱力の向上や、子どもの前で自信を持って歌うようになりたいとの思いが述べられていた。

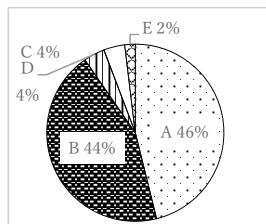
IV. 授業の成果

1. 事後アンケートの回答結果

15回の授業を終えて学生が感じていることを把握するための事後アンケートを行った。質問事項は、事前アンケートの項目から入学前の音楽経験を尋ねる項目(⑬⑭⑮)を除外し、①から⑫はそのまま用いることとした。各項目の回答結果は図13から図24の通りである。

図13 歌うことが好きである

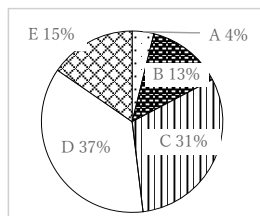
A 24人 B 23人 C 2人 D 2人 E 1人



事前アンケートと比較してみると、歌うことが好きと答えた学生は、46人から47人に増え、やや好きではないと答えた学生は0人から2人に増えた。

図14 人前で歌うことが好きである

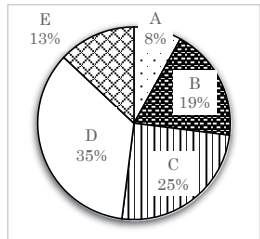
A 2人 B 7人 C 16人 D 19人 E 8人



人前で歌うことが好きであると答えた学生は13%から17%と少し増え、好きではないと答えた学生は、77%から45%と、事後では大幅に減少した。

図15 歌う時の声量に自信がある

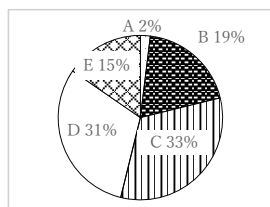
A 4人 B 10人 C 13人 D 18人 E 7人



自分の声量については、事前と事後では、自信のある学生が6%から27%に上がり、無い学生は71%から48%に減少した。

図16 歌う時の音程の正確さに自信がある

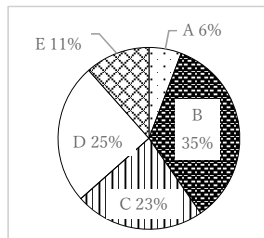
A 1人 B 10人 C 17人 D 16人 E 8人



音程の正確さについて自信があると答えた学生は事前に12%であったが事後には21%と増え、無いと答えた学生は39%から21%に減少した。

図17 歌う時のリズムの正確さに自信がある

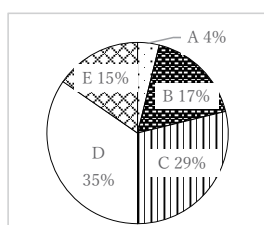
A 3人 B 18人 C 12人 D 13人 E 6人



リズムの正確さについては、自信があると答えた学生は事前に36%、事後に41%と、少し増えている。自信がない学生は58%から36%とかなり減少した。

図18 良い声で歌えていることに自信がある

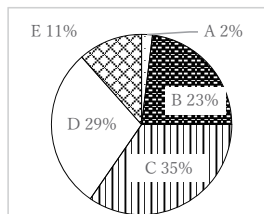
A 2人 B 9人 C 15人 D 18人 E 8人



良い声で歌えていると思う学生は、事前が4パーセントと少なく、事後では21%と大幅に増えた。また、自信が無い学生は69%から50%に減少した。

図19 歌う時の発音の明確さに自信がある

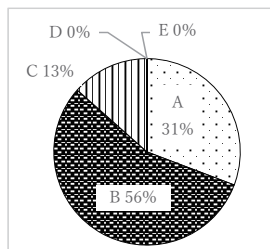
A 1人 B 12人 C 18人 D 15人 E 6人



発音が明確だと思う学生は、事前が8%で事後には24%に増えた。思わない学生は63%から40%に減少した。

図20 笑顔で歌うことを意識している

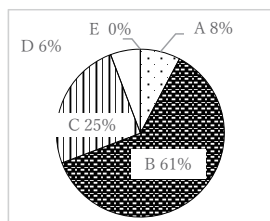
A 16人 B 29人 C 7人 D 0人 E 0人



笑顔で歌えていると事前で答えた学生は23%で少なくはなかったが、事後には87%に増加した。「いない」と答えた学生が事前で15人いたが、事後では0人になった。

図21 1曲1曲の歌をどのように歌うべきかを理解している

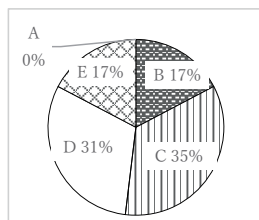
A 4人 B 32人 C 13人 D 3人 E 0人



曲への理解力については、事前が22%で、事後は69%と増えた。理解していないと答えた学生は、41%から4パーセントと格段に減少した。

図22 歌いたいと思う通りに歌える技術を持っている

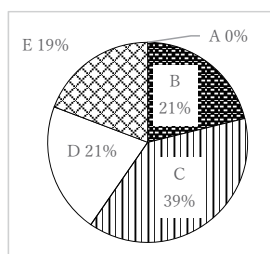
A 0人 B 9人 C 18人 D 16人 E 9人



技術をもってると答えた学生は、事前は6%であったが、事後では17%と増加した。持っていないと答えた学生は事前71%、事後では48%と減少した。

図23 他者から歌がうまいと言われる

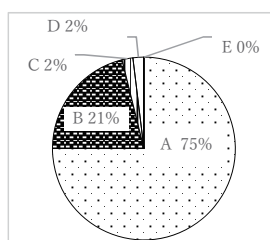
A 0人 B 11人 C 20人 D 11人 E 10人



歌がうまいと言われる学生は事前では7%であったが、事後では21%に増加している。言われないと答えた学生は、事前の64%から事後には40%に減少した。

図24 保育士や教師は子どもの前で歌えるべきだと思う

A 39人 B 11人 C 1人 D 1人 E 0人



歌えるべきだと答えた学生は、事前で98%、事後で96%と、どちらも少ないと答えた学生が一人増えただけで、ほとんど変わらなかった。

2. 事前アンケートと事後アンケートの比較

5件法での回答を求めた項目について、事前アンケートと事後アンケートを比較したところ、表1の結果となった。

なお、ここでは、A「あてはまる」とB「ややあてはまる」の数字を合計した数を「あてはまる」としてまとめた。

表1 事前と事後の回答結果の変化

① 歌うことが好きである	90%→90%
② 人前で歌うことが好きである	13%→17%
③ 声量に自信がある	6%→23%
④ 音程の正確さに自信がある	12%→21%
⑤ リズムの正確さに自信がある	21%→36%
⑥ 良い声で歌えていることに自信がある	4%→21%
⑦ 発音の明確さに自信がある	8%→24%
⑧ 笑顔で歌うことを意識できる	23%→87%
⑨ 一曲一曲をどのように歌うべきかを理解している	22%→69%
⑩ 思い通りに歌える技術を持っている	6%→17%
⑪ 他者から歌がうまいと言われる	7%→21%
⑫ 保育士や教師は子どもの前で歌えるべきだと思う	98%→96%

表1から、全体的に自分の歌唱能力に自信をもった学生が増加したといえるだろう。

事後アンケートの記述回答では、「この授業を受けて、自分の歌唱力が向上したと思うか」という問いに対して「思う」と答えた学生は52人中43人であった。その回答の理由を自由記述で求めたところ、その内容は以下のように分類できた(表2を参照)。回答数はのべ人数である。

表2 歌唱力が向上したと考える理由

歌詞の発音に気を付けるようになった	11人
腹筋を使って歌えるようになった	10人
以前より人前で歌うことが嫌でなくなった	8人
音程が正しい音に近くなった気がする	6人
呼吸法や腹筋のことを学び、声量が増えた	6人
正しい呼吸法が使えるようになった	6人
笑顔で歌えるようになった	5人
正しいリズムで歌えるようになった	5人

一方、「思わない」と答えた学生が自由記述で回答した理由は以下の通りであった。

- ・「自信を持って歌えないから」
- ・「発音や発声の方法については分かったけれど、それをまだ上手に使えないから」
- ・「ピアノが無いと出だしの音がとれないから。裏声で歌うと、みんなより声が高く外れてしまうから」
- ・「音程が取れないのが解らなかったから。大勢で歌って、自分の声ははずれてもわからない」
- ・「みんなで歌うとわかりにくいけど、一人で歌うと自分の声が良く聞こえて、下手だなあとと思うから」
- ・「発声法をやってもお腹から声を出す方法がよくわからなかった」
- ・「裏声になってしまうから」
- ・「高い音は出しにくいままだし、喉を空けて歌うのが難しいままなので」
- ・「自分では成長しているのかどうか、よくわからないと思うから」

「歌唱力が向上していると思わない」と回答した学生の記述内容にみられる彼らの歌唱能力の実態、あるいは自らの歌唱能力に対する認識は、今後の授業における歌唱指導において最も検討が必要な点である。

V. 授業での取り組み

1. 授業目標

この授業は、90分授業の45分を音楽理論、45分を声楽に分けて指導を行っている。声楽の授業で筆者が学生に心がけさせていることは次の3点である。

- ① 子どもの歌の歌詞を深く読み取り、そのメロディーの正しいリズムと音程を確認する。
- ② 正しい腹式呼吸による発声法の最低限必要な基礎を身につける。

- ③ 歌詞を美しい日本語で歌うための明確な発音を身につける。

上記で「歌詞を深く読み取る」とは、これまで無意識に子どもの歌を歌ってきた学生が、改めて歌詞を客観的に読み直す時、その歌詞と音楽の関係性の中で新しい発見をすることである。恐らくその過程で、学生には童謡の本来の魅力が見えてくるはずである。この場合、自分で授業の前に音程や音価が正しく表現できる譜読みの能力は必須である。この時に移動ドで歌ってみることは、メロディーを確認するための音程感を強化する。また、子どもの歌とはいえ、指導者として自然で豊かな歌声を習得するための発声法として、横隔膜と斜腹筋の働きにも言及している。さらに、歌詞を詩として感じとり、明確な日本語の発音で歌い、歌のメッセージを豊かに表現すること、すなわち「歌唱する力」を身につけさせることを目指している。

1年生の段階で歌唱を学ぶポイントを、前述の3点に絞っているのは、声楽に焦点化して集中的に授業で扱える期間は限られており、その期間で歌に興味を持たせるのと同時に、専門的な歌唱法の基本を身につけさせることを授業の大きな柱と捉えているからである。4年間に別の授業で弾き歌いにも取り組むが、まずは1年生の段階で歌唱力の基礎を確実に身につけさせたいと考えている。

曲数はできるだけ多く学ばせたいという思いは、多くの指導者も同じであるだろう。しかしながら、授業の目標を歌唱力の向上に置くと、時間的にも曲数が限られるため、レパートリーを広げることに限っては、止む無く学生の自主性に任せる部分もある。

2. 授業計画

45分で15回の授業を、30名弱を1クラスとし、2クラスを設定して行っている。曲目は1回の授業で基本的な童謡作品2曲を教材に、それぞれの歌詞の意味も考えながら、技術的には発声法から発音法へと丁寧に積み重ねてゆく。この授業の声楽に関する15回の授業計画は、以下の通りである。

- 1回目 オリエンテーション 事前アンケートの実施。
- 2～7回目 春・夏の歌を教材として呼吸法を基にした発声法の基礎を習得。これは最後の授業まで歌唱の軸になる。指導のキーワードは「斜腹筋」、「横隔膜」、「声の響き」である。この間、理論の授業とリ

ンクさせながら移動下の階名唱法についても触れる。

8回目 中間発表会

9～11回目 秋・冬の歌を教材に、母音と子音の役割を明確に理解する日本語の発音法を学ぶ。学生には発声法とともにこれも最後の授業まで心がけさせる。それぞれの曲の詩を朗読して詩の心をつかむ習慣をつけさせる。

12～14回目 保育現場でよく使われる生活の歌を教材に、これまで学んだ発声法と発音法を歌唱で確認してまとめる。

15回目 これまでの授業内容が盛り込まれている教材で総括する。

この15回の授業のあと、16回目に実技試験として他の学生の前で一人ずつ歌唱する発表会を実施している。

また、この授業で心がけていることは、習得する「良い声」は授業のためだけでなく、日ごろの大学生活、アルバイト先、社会に出てからも人とのコミュニケーションの基本として大きな財産ともなることを学生に意識させることである。

3. 授業における指導の工夫

3-1 「発表会」の実施

15回の授業の途中でクラスの仲間の前で歌唱を披露する「発表会」を設けている。この中間発表の曲目は、これまで学んだ課題曲の中から自分で選曲する1曲とした。通常はクラス授業で行うため、一人ひとりの声を聴いて、状態を把握することができない。この時期に発表会を行うことは、人前で歌うことに慣れさせるのと同時に、筆者が一人ひとりの歌唱能力を見極めて、力を補う必要のある項目を把握し、期末の実技試験までの指導に生かすことを意図している。

学生へのアドバイスの形態は、授業時間の関係で口頭ではなく、カードを渡す方法をとっている。カードには一人ひとりに「発声、音程、リズム、発音、笑顔」の5項目にそれぞれA、B、Cで評価を記入した。Aは「良く歌えます」、Bは「もう少し努力しましょう」、Cは「未熟なので、期末実技試験までに特にこの点を改善しましょう」というコメントであることを伝え、各自に期末試験までに解決すべき個々の課題を確認させた。

3-2 「学習ノート」の活用

学生には、授業の内容を記述した学習ノートを次の授業で提出させた。その目的は、学生がまずその日に学んだ内容を言葉で書き留めることを通して指導内容を意識化し、理解度を高めること、そして指導者が学生の理解度を確認する過程で誤って理解している点があれば、それを修正することである。

提出させた学習ノートには必ず目を通し、添削を行った。ノートには三段階評価のいずれかの印を押して次の授業で返却した。この「学習ノート」のやり取りは、集団授業の中での各学生とのコミュニケーションに有効である。

音楽表現活動I(基礎)学習ノート		月	日	学籍番号
				氏名
1. 学習目標・到達度・自分の課題				
	課題曲	学習目標		自分の課題
1		目標		
		到達度	5 4 3 2 1	
2		目標		
		到達度	5 4 3 2 1	
3		目標		
		到達度	5 4 3 2 1	
2. 学習内容メモ				

使用した学習ノート

3-3 期末実技試験

試験曲は2曲で、1曲目は試験2週間前に指定した課題曲で、2曲目は授業で学んだ曲の中から9曲を指定し、そこから学生自身が5曲を選び、教員である筆者が当日に1曲を指定した。曲は1番のみを暗譜して歌唱する。この発表会では、学生全員が同席する中で1人ずつ歌うが、他の学生は背後で聴いている形態で

ある。

VI. 授業の成果と問題点

1. 事後アンケートの結果について

事後アンケートの12項目のうち、学生が「向上した」と感じていた項目「笑顔で歌う」「歌詞の発音を明確に歌う」「それぞれの曲を理解する」「声量の増加」に関しては、授業の効果が出ていることが確認できた。しかしながら、「音程の正確さ」「リズムの正確さ」など、音楽のごく基本的な能力で自信を持つことができた学生の増加率は、より高い数値を得ることが望ましい。

正確な音程で歌うことや、リズムを正確に取ることについては、個人の音楽能力に関わる内容であり、集団授業の形態では一人ひとり異なる音楽能力のあり方に対応することが困難であることが、この結果の背景にある。

2. 授業の進め方について

学生の自由記述から、学生からの質問や意見を取り上げる機会が少なく、授業の進め方に工夫が必要であることがうかがえた。45分間に歌唱の基本的な技能を多数の学生に伝達しようとするあまり、指導者側から一方的に情報を与えるものになっている。これは、学生との双方向的なやり取りを取り入れるなど、今後の改善が必要である。

3. 学習ノートに取り組む意味

学生一人ひとりの歌唱能力と学習ノートをまとめる能力とは必ずしも一致しない。歌唱能力としてすぐに授業の成果が出せない学生でも、その方法を理論的に理解できる能力を評価する必要もあることから、学習ノートの記述内容も重視している。また、曲についてのアナリーゼ的な記述には五線紙も必要と思われる。現在の学習ノートの形式改善が望まれる。

4. 個々の歌唱能力の把握について

当然のことながら、学生それぞれの歌唱能力には差があり、多数の集団授業では一人ひとり歌唱能力を把握することは不可能である。中間発表は個々にアドバイスのできる良い機会ではあるが、これも45分間に30名弱の学生の歌唱を聴くため時間が取れず、や

むなく各学生にコメントを記入したカードを使用し、アドバイスをを行った。

事後アンケートの記述には、個人レッスンを希望する意見も見られたように、記述したコメントのみで実技指導を行うことは困難である。また、集団授業では、他の学生の前で個人の長所を褒めたり逆に注意したりすることにも限界があり、課題が残る。

VII. 学生の実技能力と意識の乖離

保育士・教員養成課程に入学してくる学生たちの興味や得意分野は当然ながら様々である。事前アンケートの回答から、彼らの音楽の授業で歌った機会についての回答をみると、高校までの授業で歌う機会が多くあったと答えている学生は、小学校で69%、中学校で48%、高等学校では13%と答えており、校種が上がるにつれて、授業で歌う機会が少なくなっていることが明らかとなった。

また、学生の好きな「歌」は、恐らくそのほとんどが教室の外に溢れるポップな音楽であり、教科書の歌ではない傾向は容易に想像できる。このような現状において、保育士・教員養成課程の音楽授業で憂慮することの一つに、学生の子どもの歌の認知度が低くなってきていることがある。

現代社会において急速に失われようとしている「自然をいつくしむ心」「生き物たちへの優しい眼差し」など、生きることの大切なテーマが童謡の詩には凝縮した形で込められている。また、時にはゆったりと、時には生き活きとしたその音楽は、シンプルな音の魅力にあふれ、子どもから大人まで誰の心にも届く。本来ならば、祖母や祖父、あるいは父や母から歌い継がれているはずの童謡が、家族構成や生活の変化によって、伝えられる機会を極端に失っていることも事実である。童謡の魅力を改めて知ることによって、歌唱技術を習得する意欲も湧いてくるのではないだろうか。

アンケートの回答から読み取れる学生自身の意識と実際の歌唱能力とを鑑みても、本人の歌唱能力に対する認識と実際の歌唱能力は必ずしも一致しないことがある。これは、学生一人ひとりが、どのように歌えることを目指しているかにも関わっている。たとえば、レベルの高い表現を目標に置く場合、それを基準とすれば、自分の歌唱能力を低く認識する場合も起こり得るのである。

自分の力を正しく認識するには、指導者から一人ひとりの実技能力の状態を把握した上で、的確なアドバイスを受けることが必須である。音楽実技は、たとえ同じ言葉で指導をしたとしても、効果は一樣ではない。なぜなら、音楽表現はさまざまな音楽的な知識と音の認知能力、音楽を感受し解釈する感性、身体そのものの一人ひとりの特性、身体の実操作能力といった個人差の大きい要素が複合して生み出されるものだからである。

声楽においていえば、その学生が持っている自分では気づかない声の美しい響きや音楽的な感性から生まれる豊かな表現力などは、指導者がそれに気づいて言葉にして褒めることで初めて認識できることもある。音楽表現は、あまりにも複雑な要素が関わっているためそれぞれに客観的な基準が示しにくく、自分よりも熟達した表現者や演奏家に指摘されることで、理解できることが少なくない。中でも声の響きについては、発声の個人レッスンの中で突然に得られる場合もある。自分で正確だと思っていっても音程を低く歌っていることに気付いていなかったり、付点のリズムが曖昧であったりするが、これらは集団での表現では気づきにくく、個別での指導を続けるうちに習得できるもので、自分一人では成果が出しにくい。

VIII. 集団授業の利点と問題点

声楽の授業の事前・事後でアンケートをとったことで、一人ひとりの学生の思いを知ることができた。その結果から推察できる声楽の集団授業での実態、またその利点と問題点に触れてみたい。

まず、曲の解釈と理解については集団授業の方が能力が良い。また人前で歌うことに慣れるというメリットもある。加えて、自分で客観的に自分を観察できるという点では、集団授業でもある程度能力が上がる。例えば「笑顔で歌う」「歌詞の発音を明確に歌う」「声量を増やす」については、自分で録音が可能であったり、鏡を見て自分で判断出来たり、友人に聴いてもらえたりして、ある程度自力で補うことができる。また学習ノートの利用も学生個々の理解力を知る上では効果的である。

一方、歌唱のテクニク的な項目についてはどうしてもマンツーマンでの指導が必要となる。例えば、体の発声器官を正しく使って健康的な良い声で歌えてい

るかどうか、あるいは学生自身ではなかなか判断しにくいリズムや音程の正確さ、表情豊かな表現方法、歌詞の発音に対する細やかで正確なアドバイスなどの項目は、やはり個人レッスンでしか実現できない。

集団授業という形態で、能力があるにもかかわらず不必要なコンプレックスを抱いている学生には自信を持たせて、能力の低い学生には個々に長所を褒めて伸ばすという、教育として最も基本的なことが十分に行えるかは、将来に向けての大きな課題である。実際、アンケートの記述の中に「個人的に良いところを褒めてもらいたかった」という回答もあった。音楽実技の授業としては、ピアノの個人レッスンと同様に、たとえ短時間でも授業内容に声楽の個人レッスンを盛り込む必要がある。例えば、15回のレッスンの中に集団授業と個人レッスンの両方を機能的かつフレキシブルに組む、あるいは、やむを得ず集団授業をとる形態での許容人数なども検討項目となる。

IX. おわりに一保育士・教員養成課程における声楽指導に向けて

今回、筆者の授業の事前と事後に行ったアンケートからは、この授業を通して多くの学生たちが声楽実技の多くの項目で自信を持てるようになったという成果が読み取れた。しかしながら、項目中の「正確な音程で歌う」「正確なリズムで歌う」などの極めて基本的な歌唱能力について自信が持てる学生については、期待するほど増加していなかった。ここから、個々に能力の差がある学生にとって、能力に応じた個人レッスンを受ける必要があることが明らかとなった。一人ひとりへの状態に応じた指導は、実際の能力の客観的な把握と、目指すべき目標の明確化、個々人の課題に対する対応を可能にする。

音楽活動に携わる保育士や幼稚園教諭、小学校教諭にとって、必要とされる歌唱能力とは何か。

とくに保育士、幼稚園教諭の歌声としては、中～低音域において健康的で美しい声、場合によっては胸声（発声的に訓練された地声）で歌える能力が必要である。また実際の現場においては「弾き歌い」が求められるのが現状であり、ピアノの伴奏を自分で弾きながら歌うと、一般的に歌唱力は半減する。基礎から積み上げる高い歌唱力は、最終的な目標である「童謡の弾き歌い」の大きな自信にもつながる。

一方、小学校教育では、子どもの年齢の幅が広く、年齢に応じて声域も広がるため、指導者自身も高音では、頭声を美しく響かせるという声楽的な専門技術が必要になる。また歌詞の内容も深くなるため、文学的な理解力も重要である。

共通する能力として、子どもたちに実際に歌って聴かせるために、指導者自身にとって「正しい呼吸法による発声法」と「美しい日本語の発音法」などの歌唱技術の修得は欠かせない。また、教材としては、優れた詩人と作曲家による音楽的で含蓄のある子どものための名曲を、学生は常に詩と音楽の両面から研究することを心がける必要がある。例えば、昔から伝統的に歌われる歌、保育士・幼稚園では行事の歌、同じく小学校教育では「共通教材」の研究が重要で、歌の生まれた歴史的背景、歌の詩に盛り込まれた日本の自然の季節感に溢れた美しさ、人の心の優しさなど、唱歌の奥深さを知り、次の世代に継承してゆくことも大切である。

また、教材となる歌の「魅力探し」を出発点とすることも重要である。特に歌詞を「詩」として読み取ること、すなわち詩人の盛り込む意味や背景を十分に感じ取れる力、同時に楽譜からもそれを読み取る能力が備わっていれば、必ずその歌の魅力を発見できる。そこから、学生たちはその歌にふさわしい声ははっきりとイメージできるだろう。そして、自らの身体を通して、歌唱技術の修得をしようとする積極的な取り組み、加えて表現の工夫を重ねようとする姿勢も生まれてくる。その意味で、声楽授業の役割は、学生自身が表現しようとする音楽のイメージを具体化して、それに求められる声や表現などに必要な技術としての発声法や発音法などを提示して、実践的にサポートすることである。

注

- 1 A大学では、教育コースで小学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、特別支援学校教諭一種免許状が取得できる。また、保育コースでは、保育士資格と幼稚園教諭一種免許状が取得できる。
- 2 この授業を、小学校教諭を目指す学生が履修することは少ない。

参考文献

- F. フスラー/Y. R-マーリング『うたうこと 発声器官の肉体的特質－歌声のひみつを説くかぎ－』須永義男・大熊文子訳、音楽之友社、1987。
川上泰『日本語音声概説』桜楓社、1977。

(2018年10月23日受稿, 2018年11月26日受理)

A Study on Acquisition of Singing–skill for Students on Nursery and Teacher Training Courses: From the Students’ Opinion Survey

HIRAMOTO Hiroko ⁽¹⁾

Most new students in infant and elementary school teacher training courses have little prior experience studying music, and it can be challenging to bring their music skills up to appropriate coaching standards. In an effort to improve the singing lesson, a survey for the students’ opinion refer to “singing” was given before and after the author’s lesson. By comparing survey responses and student’s capabilities, I was able to identify current problems as well as potential future issues. The survey revealed each student’s musical abilities as well as their gaps and complexities in knowledge and skill requirements. I also verified my class contents. Generally, piano practice takes place via private lessons to build each student’s capabilities. By contrast, singing practice is generally taught through group lessons. I defined the issues and effects by analyzing my group lesson’s contents. With this in mind, I have also explored the common points and differences in the lessons of infant and elementary school teacher training A Study on Acquisition of Singing-Skill on Training-Courses of Infant and Elementary School Education courses.

Keywords : Singing, Singing capability, Group lesson

⁽¹⁾Part-time Lecturer at Faculty of Education, Fukuyama City University